

第3章 総括

第1節 土師器筒形容器について

はじめに

宮ノ谷Ⅱ経塚は、調査時にはかなり崩壊していたが、かろうじて土師器底部とそれを囲む石組が原位置を保っていた。その構造は、平面不整円形土壙底の山側奥部に接して平面「コ」字形の石組みをおこない、石組内部に土師器筒形容器をおさめるもので、横穴は穿っていないものの、森内秀造氏による横口式小石室をもつ経塚（森内1985、森内2011）、杉原和雄氏による「丹後型埋経遺構または遺跡」（杉原2001）、森嶋康雄氏による「横穴付土坑をもつ経塚」（森嶋2003）に分類されるものである。ただし、本例において、森内氏のいわれる石室（石組）が、横口式の構造となっていたか否かについては後世の破壊によりかなり崩壊していたことから判断し難い。いずれにせよ、このような構造形態の経塚は、杉原氏が「丹後型土師製筒形容器」（杉原2001）と呼称されるように京都府丹後地域において多数の類例が分布しており、兵庫県北部の但馬地域においても数例が認められている。

本遺跡では筒形の土師器容器が石組の中におさめられていたが、この形態の土器も丹後地域に顕著に認められ、その数も圧倒的に多い。但馬地域では数遺跡に認められ、兵庫県の丹波・播磨地域においても発見されている。その性格について杉原和雄氏は、京都府北部にあっては骨臓器としての用途を強調（杉原1987、杉原1989）されたが、その後①経筒②経筒を納める外筒③蔵骨器といった3通りの用途（杉原2001）として慎重な判断に変更されている。本例では経塚と判断したが、遺構全体が墓であった可能性を完全に否定するものではない。ただし、土師器筒形容器は埋経の用途としてとらえている。

土師器筒形容器の類例

前回の宮ノ谷古墳群調査の際にも土師器筒形容器が石組とともに検出されている（別府・平田他2010）。宮ノ谷2号墳の第1主体部墓壙北東隅で検出されたSK7は、土壙の東側壁下に一段深く掘った穴に石組を設けたもので、南隣にあるSK2埋土から土師器筒形容器の破片が出土している。身の底部や蓋の天井部にタタキ目は認められないが、口径や蓋口縁部端部の形状が本例のものとよく類似している。14世紀頃と考えられる土師器壺の破片が伴出している。

兵庫県但馬地域では、ほかにいくつかの遺跡で土師器筒形容器が発見されている。

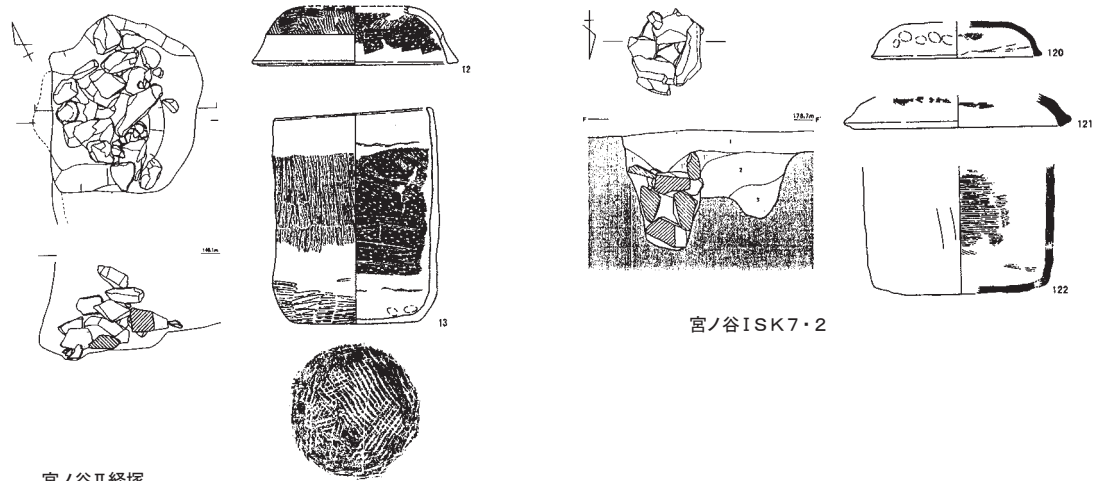
豊岡市出石町田多地3号経塚（森内・別府他1985）は円形土壙の内壁に横穴を穿ち、板石で小石室を設けて土師器筒形土器を納めていた。筒形土器は底をもたず、高さ20.7cm、口径16.7cmで、蓋は身と合わせ口になり、口縁端部を内側に折り曲げている。この蓋上には宝珠つまみとつまみの台座が乗る。

豊岡市日高町馬場ヶ先古墳経塚（櫃本他1980）では、土壙は不明であるが、複数の土師器筒形容器が出土している。容器は、蓋と身が合わせ口になるものと、蓋の径が身よりかなり大きく被せた際に蓋側の隙間が多いものの2種が認められる。蓋および身の形態は宮ノ谷Ⅱのものとはかなり異なっている。

養父市八鹿町比丘尼経塚・中世墓群では、比丘尼古墳墳丘上の3号墓（谷本1993）は接続した2つの石室の一方に土師器筒形容器を納めており、片方の石室側から銅銭6枚が出土している。容器身は高さ24.0cm、口径14.5cmで、体部外面に人名を焼成前に刻銘している。蓋は高さ3.2cmを測り、天井部が平らで身にきれいに被さる形態である。宮ノ谷Ⅱの身よりも細長く底部は平らで、蓋も形態が異なる。

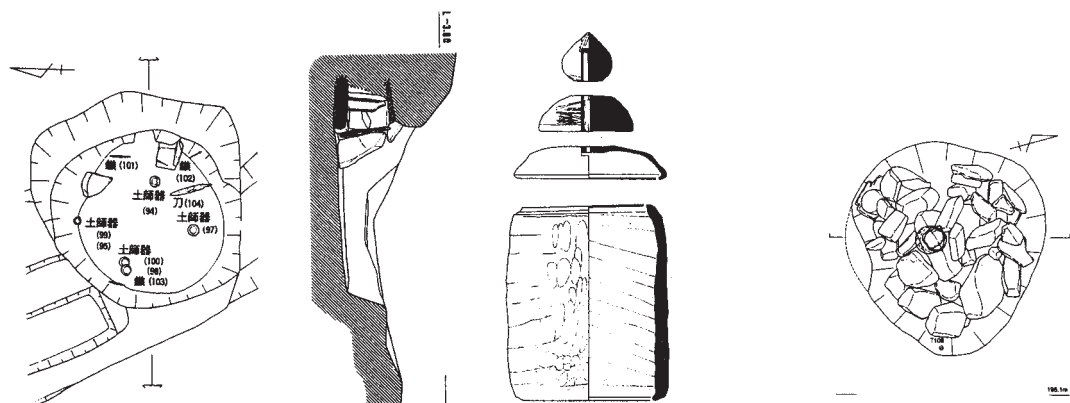
朝来市和田山町一乗寺経塚（藤田1999）は、接する3基の竪穴全体を石で覆ったもので、13世紀後半

～14世紀と思われる土師器埴が封石の隙間から出土している。1号経塚は、楕円形の堅穴の一部を横穴状に掘り窪め、土師器筒形容器を置いて板石で塞ぎ、堅穴全体に石を詰めていた。口径18.6cm、器高30.5cmと宮ノ谷Ⅱ例よりかなり大きく、底が平らである。蓋はつまみが付く扁平な形態で、口縁端部は短く真下にのびる。2号経塚も構造的には1号経塚と類似するが、銅製経筒を逆転させた土師器筒形容器で覆っており、詰石中央にも空間を設けて土師器筒形容器を納めていた。経筒を覆っていた外容器は底部が丸く宮ノ谷Ⅱ例に似るが、器高28.8cm、口径16.5cmと大きい。上層の容器は底が平らで器高19.5cm、口

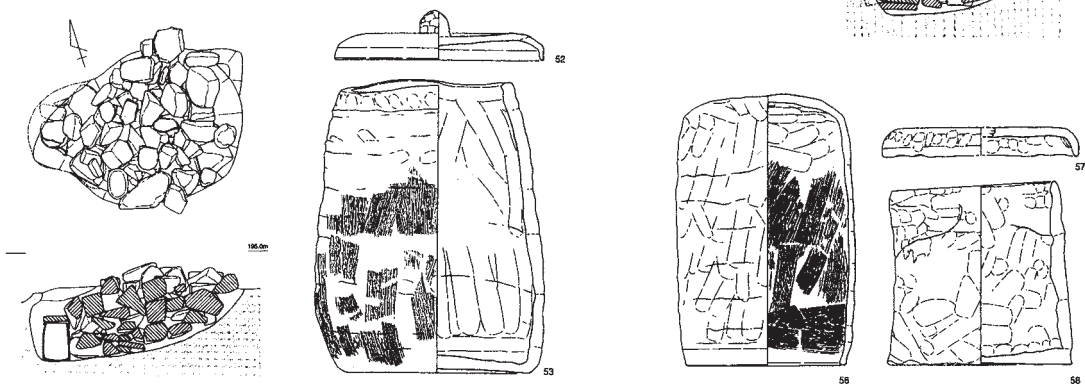


宮ノ谷ISK7・2

宮ノ谷Ⅱ経塚



田多地3号経塚



一乗寺1号経塚

一乗寺2号経塚

第4図 土師器筒形容器の類例（遺構1：60、遺物1：8）

径17.0cm、蓋は口径20.1cm、高さ3.1cmと扁平で、形態的に宮ノ谷Ⅱ例と大きく異なる。

豊岡市但東町畑森経塚（瀬戸谷他1985）では土師器筒形容器が出土しており、器高23.1cm、口径17.0cmで、底がやや丸く口縁端部が内傾する点でも宮ノ谷Ⅱ例に類似するが、端部に幅広い面をもつ。

ほかに豊岡市香住エノ田中世墓や養父市関宮町上向田中世墓でも土師器筒形容器が出土している。

土師器筒形容器は土器編年が確立されていない現状があり、形態的にもばらつきが多く、小地域単位に絞ってみても、それぞれで異なる部分が多く共通性が少ない。また、蓋と身の合わせ方でも、合わせ口になるA型、蓋口縁部が垂直ですっぽり被さるB型、蓋口縁部が下外方にのび、蓋との間隙が多いC型に分けることができるが、これも同一遺跡内においてさえばらつきが認められる。

时期的には伴出遺物により13世紀～14世紀が多いと思われるが、丹後地域等では、12世紀第4四半期から13世紀中頃に盛行し、上限が12世紀中頃、下限が15世紀中頃（杉原2001）であるとされている。

おわりに

土師器筒形容器の製作は、広範囲に同一形態が認められないことから、その製作は小地域単位またはさらに小さな単位でまかなわれていたと推定することができた。

時期については限定できる材料に乏しく、丹後地域での検討にもとづき中世前期と推定した。その頃には、これまでいわれているように、埋経の目的が追善供養や現世利益に変化していると考えられ、さらに簡略化されて、本来埋経のためであった土師器筒形容器が蔵骨器としても使用されたのであろう。

このように、土師器筒形容器の用途については、埋経を基本とし、蔵骨器としても利用されていたと想定しているが、遺構全体の機能の検討とともに、また、土師器筒形容器が経筒そのものか外容器かという問題についても紙数および時間の都合から検討できなかった。これらは今後の課題としたい。

なお、本文で扱った資料の類例の多くは、2001年12月におこなわれた『第19回但馬考古学研究会・両但考古学研究会交流会資料集－中世土器と経塚・古墓－』に負うところが大きい。

本文を記述するにあたり、森内秀造氏より資料の提供とともに多くのご教示を賜った。

参考文献

- 杉原和雄 1987「経塚遺構と古墓」『京都府埋蔵文化財論集』第1集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
杉原和雄 1989「経塚と墳墓」『考古学雑誌』第74巻第4号 日本考古学会
杉原和雄 2001「近年調査された京都府北部出土の土師製筒形容器とその遺跡について－経塚と墳墓を考える－」
『京都府埋蔵文化財論集』第4集－創立20周年記念誌－（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
瀬戸谷皓他 1985『但東町の埋蔵文化財』（2） 但東町教育委員会・但馬考古学研究会
谷本 進 1993「6世紀の墓制からみた宿南びくに古墳」『但馬考古学』第7集 但馬考古学研究会
櫃本誠一他 1980「考古編」『日高町史資料編』
藤田 淳 1999「一乗寺経塚の調査」『向山古墳群 市条寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡』兵庫県文化財調査報告 第191冊 兵庫県教育委員会
別府洋二・平田博幸他 2010『寺山古墳群 宮ノ谷古墳群 諏訪城跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告 第378冊 兵庫県教育委員会
森内秀造 1985「田多地経塚群について」『田多地古墳群 田多地経塚群Ⅰ』出石町文化財調査報告書 第2冊 出石町教育委員会
森内秀造 2011「兵庫県但馬地方を中心とした経塚の概観」『経塚考古学論考』安藤孝一編 岩田書院
森内秀造・別府洋二他 1985『田多地古墳群 田多地経塚群Ⅰ』出石町文化財調査報告書 第2冊 出石町教育委員会
森嶋康雄 2003「京都府北部の経塚」『平成15年度国立歴史民俗博物館 経塚データベース会議発表資料』